

氏名	沢尾 絵
学位の種類	博士（学術）
学位記の番号	甲第168号
学位授与年月日	2013（平成25）年9月20日
学位授与の条件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	江戸前期天和年間における染織品の実態研究 —三井文庫本『宗感覚帳』・『染代覚帳』の染織史的考察を基に—
論文審査委員	主査 佐々井啓（生活環境学専攻 教授） 副査 大塚美智子（生活環境学専攻 教授） 増子富美（生活環境学専攻 教授） 森理恵（被服学専攻准教授） 小笠原小枝（日本女子大学名誉教授） 河上繁樹（関西学院大学文学部教授）
※なお本博士論文は、「博士論文のインターネット公表に関するガイドライン」3（2）により、以下の8,000字の要約及び可能な限りマスキングをした博士論文を掲載する。	

## 論文の内容の要旨

### 【目次】

#### 序論

1. 研究の背景
2. 従来の研究
3. 研究目的および研究方法
4. 論文の構成

#### 第1章 本研究の主となる史料（資料）とその背景

1. 越後屋呉服店について
2. 『宗感覚帳』（三井文庫所蔵）
3. 『染代覚帳』（三井文庫所蔵）
4. 同時期の井原西鶴の作品
5. 小袖雛形本

#### 第2章 『宗感覚帳』にみる江戸時代前期の染織品と価格

1. はじめに
2. 『宗感覚帳』と西鶴作品の染織品と価格の比較
3. 考察

#### 4. 結語

### 第3章 『染代覚帳』記載の染色価格

1. はじめに
2. 『染代覚帳』の内容
3. 価格に関する考察
4. 結語

### 第4章 『染代覚帳』記載の染色名称

1. はじめに
2. 五所紋付、小紋、小紋五所紋
3. 『染代覚帳』の地色の考察
4. 特定の技法を示す染色名称
5. そのほかの染色名称
6. 染色の追加料金と反物の変更代金
7. 結語

### 第5章 結論

図表一覧

参考文献

要旨

Summary

謝辞

以下本論

---

#### 【序論 研究の背景・従来の研究・本研究の目的および研究方法】

江戸時代前期の染織品に関する研究は、現存資料のほか、当時出版された小袖雛形本や染色関連の技法書、初期風俗画などを手がかりとして、主に小袖服飾における意匠形式や文様に着目して進められてきた。その資料の多くは社会的地位の高い支配者層や富裕町人層、遊女などの特別な立場の人々を対象としたものである。そのため、得られる研究成果も、多くは一定の階層の人々の服飾に関するものであることが多い傾向にある。また、実物資料が存在しない時期もある。特に江戸時代前期の天和期（1680～1683年）を中心とする時期については、年紀の明らかな実物資料が存在しないとされる、いわゆる空白期であるために、この時期における染織史の位置付けがなされないままであった。

そこで本研究では、この天和期に着目し、同時期の染織史研究の資料として新たに公益財団法人三井文庫所蔵の2種類の呉服関係史料『宗感覺帳』・『染代覚帳』を加える。さらに、これまで検討されてきた小袖雛形本、井原西鶴の作品、初期風俗画などを呉服史料の観点から改めて見直していく。これにより、江戸前期天和年間すなわち1600年代最後の四半世紀の京周辺の町人層を中心とする人々

の衣生活に関わる染織品の実態に迫ることを目的としている。

## 【第1章 本研究の主となる史料とその背景】

本研究における主たる資料『宗感覚帳』・『染代覚帳』は公益財団法人三井文庫が所蔵する歴史史料である。研究に先立ち、第1章では江戸時代前期に創業した三井家の越後屋呉服店とその前身を踏まえた上で、資料の書誌学的考察と内容把握を行った。また、これらの資料における記載内容をより深く解釈するために、比較検討資料として用いる井原西鶴の作品および小袖雛形本について、資料としての特性と意義をまとめている。概要は以下の通りである。

### (1) 越後屋呉服店 延宝元年(1673)、三井高利創業

・「現金売り」「掛け値なし」の新しい商法のほか、「反物の切り売り」「仕立て」などで大成功する。

### (2) 『宗感覚帳』 三井文庫所蔵(天和3年～元禄3年〈1683～1690〉)

縦 9.7cm、横 20.5cm、全 51 丁、18 項目

・三井高好(高利の6男)による記録

・染織品に関する2項目「亥七月店落残」「呉服物相場書上」に注目。

反物の名称と価格の整理をして表にまとめ、本研究の基礎資料とした。

### (3) 『染代覚帳』 三井文庫所蔵(天和3年〈1683〉)

縦 26.5cm、横 18cm、全 14 丁、120 項目

・染物の名称と価格の記録

・新資料のため、全記載内容を読み下し、一覧表にまとめて基礎資料とした。

### (4) 井原西鶴の作品

江戸時代前期の染織・服飾事情を総合的に捉える手がかりとして、井原西鶴の7作品に描かれる染織品に関する記述を網羅的に抜粋し表にまとめた。

### (5) 小袖雛形本

江戸時代に出版された小袖の図案帳は現在120余種存在しているとされる。時代の最先端の文様や意匠表現を染屋や呉服屋に提供する、または、武家の子女や富裕町人層などが小袖を注文する際に参考にした。本研究では、以下にあげる言葉書きのある天和年間前後の9種の小袖雛形本に記載される文字情報を表にまとめた。

本研究では、これらの基礎資料をもとに2章から4章の研究を展開する。

## 【第2章 『宗感覚帳』にみる江戸時代前期の染織品の受容と価格】

第2章では、『宗感覚帳』『呉服物相場書上』と西鶴作品に共通して見られる染織品を抽出して対照し、価格帯の明らかな毛類、縹子、紬、綸子、龍文(竜門)、紗綾、縮緬、羽二重、ビロードの実態について考察した。考察に際し、反物の特徴、国産品・輸入品の検討資料として『万金産業袋』(三宅也来〈1732〉)と『唐船輸出入品数量一覧』(永積洋子編)を用いた。その結果、毛類、縹子、紬、綸子、龍文(竜門)、紗綾、縮緬、羽二重、織物のビロードは、当時一般庶民には手の届かない非常に高価な

ものであることが導き出された。

最も高価な羅紗や毛氈を敷物として使用できたのは商売に成功した豪商であり、その様子が同時期の風俗画に描かれていることもわかった。

縹子、紵、縹子といった高価な染織品を小袖として贅沢に使用できたのは、太夫や歌舞伎女形役者、裕福な町人層など経済的に余裕のある立場の人々であり、茶屋女や一般町人は、足袋や腰巻など部分的に服飾の中に取り込むことで贅沢感を楽しんでいた。ビロードについては織物のビロードとこれを追随する形で出てきた染物の「びろうど色」が同時に存在した。また井原西鶴が丹念な服飾描写だけでなく、登場人物の立場や経済面を考慮した染織品を選択して描いていることも明らかとなった。

### 【第3章 『染代覚帳』記載の染色価格】

第3章では『染代覚帳』に記載された内容の詳細を明らかにすると共に、記載されている染色価格が、江戸前期当時においてどのような位置にあったのか、西鶴作品に描写される町人風俗・金銭感覚との比較を通して具体的な解明を試みた。

『染代覚帳』は「絹紵染代」「木綿麻布」の二部構成である。絹紵や木綿・麻布は、『染代覚帳』が写された同年、天和3年(1683)2月の禁令において、百姓・町人・その妻子が分限相応に着るものとして定められている。そのため、『染代覚帳』が町人層の衣類に関わる呉服関係史料である可能性を念頭に検討を行った。

価格の検討に際し、染代金の上品に着目し価格を昇順に並べた結果、「絹紵染さらさ三重形6匁5分」が最も高価であることが分かった。この価格を目安に、西鶴作品に描かれる富裕町人層、質素に暮らす庶民層と比較検討を行った。その結果、『染代覚帳』に記載される染代金は、質素に暮らす庶民層にとっては晴着に値する大変贅沢なものであったことが分かった。またこれらの考察から、『染代覚帳』が経済的に余裕のある町人・職人層を対象とした呉服関係の染色資料と位置付けることができた。

### 【第4章 『染代覚帳』記載の染色および加工名称】

第4章では、『染代覚帳』に記載される染色・加工名称に着目し、天和年間当時の小袖服飾・染色の実態解明を進めた。考察に際し風俗画、小袖雛形本、各種染色技法書・指南書を検討資料とし、実際に存在した染色品の記録である『染代覚帳』の内容を具体的に捉える手段とした。

#### (1) 五所紋付・小紋・小紋五所紋

五所紋付は西鶴作品において、商売に成功して裕福になった町人が着用している。また、住吉具慶作「都鄙図巻」「洛中洛外図巻」では、五所紋付や小紋五所紋を中流から下級武士、町人・職人層・女性が着用している姿が描かれている。

小紋は江戸時代初期の武家服飾の現存資料が残され、江戸時代後期には江戸町人の粋の文化の代名詞とされる。しかし天和年間頃の町人服飾を中心とした小紋の実態は明らかではなかった。本研究では『染代覚帳』で全項目中約三分の一が小紋であること、『紺屋茶染口傳書』(1666)や西鶴作品中の町人の服飾にも小紋が見られること、風俗画においても町人・職人層および女性の着用例が認められた。よって天和年間当時、京周辺の町人層の間ではすでに小紋が着られていたことが明らかとなった。

## (2) 無地染

『染代覚帳』に記載される無地染を系統色で分類すると、茶・青・緑・橙・鼠・黒系統が見られた。同時期の小袖雛形本における地色と比較すると、小袖雛形本で多用される赤・黄色系統が見られなかった。武家の子女や富裕町人層が使用したとされる小袖形雛形本と『染代覚帳』との使用者層の違いが明らかであると共に、赤・黄色系統の染料が裕福な人々しか使用できない高価な染料であったことを裏付けている。

## (3) 染さらさ

「染さらさ」の技法はこれまで明らかにされていなかったが、『染代覚帳』「染さらさ」の項目と小袖雛形本の記述から2枚、3枚の型と糊を使用する型染であることがわかった。また、輸入の更紗が木綿地であるのに対し、日本では絹地にも染められていたことがわかった。

## (4) 染色の追加料金・反物の変更代金

『染代覚帳』には、鹿の子染代、上絵描き代、文字染代などの染色の追加料金・反物の変更代金の設定が見られる。これは、注文者の好みに応じて地質の変更、染色、紋、上絵などを組み合わせた注文が可能であったことを示す。客の好みに応じて注文内容を自由に決めるシステムがすでに構築されていたことが明らかとなった。

## 【第5章 結論】

本研究の成果を以下にまとめる。

1. 毛類・縞子・紵・綸子・龍文・紗綾・縮緬・羽二重・織物のビロードを使用できたのは富裕町人層であった。
2. 西鶴作品は、登場人物の服飾だけではなく経済状況も考慮して染織品を選択していた。
3. ビロードは、高級輸入織物のビロードと、これに追随する形で出てきた国産の安価なびろうど色の2種類が、天和期頃に同時に存在した。
4. 『染代覚帳』において最も高価な「染さらさ三重形6匁5分」という価格は、質素に生活する庶民層にとって贅沢な価格であることが捉えられた。また、西鶴作品、各種文献、絵画史料との比較考察より、『染代覚帳』が対象とする客層は上方を中心とした中流～下級武士、町人・職人層、女性であったと考えられる。加えて今まで不明であった染さらさの技法が、複数枚の型による型染で、木綿だけでなく絹紬にも染めていたことが明らかとなった。  
従来小袖雛形本の文字表記の中で納得いく説明がなされなかった「ぢびろうど」や「ぢさらさ」の意味の解明は、小袖雛形本研究にも寄与するものである。
5. 五所紋や小紋五所紋は、江戸前期において武士だけでなく町人・職人層、女性までもが着用したことがわかった。ただし紋所は武士のものが白上げであるのに対し、町人・職人層・女性の物は型染、描き、繡など、別の技法の可能性が見られた。
6. 小紋は『染代覚帳』全項目の3分の1を占め、天和年間には武家層以外に町人・職人層、女性の間で需要があった。これは、従来の小紋普及の捉え方に再検討の必要性を提示するものです。
7. 地色系統の比較において、小袖雛形本に最も多い赤・黄系統は『染代覚帳』には全く見られず、

それに代わって藍・茶色系統が一番多かった。これは赤・黄系統がいかに高価な染料であったかを示すと同時に、当時から町人層などの社会の中間層が着装できる天然染料による色の色相というのが藍と茶系統であったことを示すものである。

8. 『染代覚帳』には加工賃や地質変更の項目があり、客の好みに応じた注文システムが存在したことを示す。

以上、本研究では『宗感覚帳』および『染代覚帳』を江戸時代前期の染織史研究における新しい資料として提示した。また、その内容を詳細に検証したことで、これまで不明であった江戸前期天和年間頃の町人層を含む人々の小袖服飾や染織品の実態について具体的な見解を得ることができた。今後は、『宗感覚帳』『染代覚帳』に依然として残る、技法の明らかではない染織品について具体的な検証を試みることで、また、17世紀末の京において、より町人に近い人々の間で着実に芽生えていた服飾や染織品が、その後どのような展開をみせるのか、江戸に普及するのはいつ頃なのか、明らかにしていくことが課題となる。

## 【図表一覧】

### 【主要参考文献】

#### ◆史料

『雁金屋雛形帖』万治4・寛文3年(1663) 大阪市立美術館所蔵

『四季模様諸礼繪鑑』万治3年(1660)、東京国立博物館蔵

『紺屋茶染口傳書』寛文6(1666)、(後藤捷一・山川隆平編『染料植物譜』pp.578-596 染織文化社、1931~1936)

『御ひいなかた上・下』寛文6・7年(1666・1667)、小袖雛形本集成、学習研究社、1974

『御雛形萬女集』延宝・天和頃、東京大学総合図書館蔵

『新板小袖御ひいなかた』延宝5年(1677)、小袖雛形本集成、学習研究社、1974

『新撰御ひいなかた』延宝9年(1681か)、小袖雛形本集成、学習研究社、1974

『新板当風御ひいなかた(当世早流雛形)』天和4(1684)、小袖雛形本集成、学習研究社、1974

『今様御ひいなかた』貞享2年(1684)、高田装束研究所／大丸松坂屋染織参考館蔵

『諸国御ひいなかた』貞享3年(1686)、小袖雛形本集成、学習研究社、1974

『源氏ひなかた』貞享4年(1687)、小袖雛形本集成、学習研究社、1974

井原西鶴『好色一代男』天和2年(1682)、日本古典文学大系 47 西鶴集上、岩波書店、1957

井原西鶴『好色五人女』貞享3年(1686)、日本古典文学大系 47 西鶴集上、岩波書店、1957

井原西鶴『好色一代女』貞享3年(1686)、日本古典文学大系 47 西鶴集上、岩波書店、1957

井原西鶴『日本永代蔵』貞享5年(1688)、日本古典文学大系 48 西鶴集下、岩波書店、1960

井原西鶴『世間胸算用』元禄5年(1692)、日本古典文学大系 48 西鶴集下、岩波書店、1960

井原西鶴『西鶴織留』元禄7年(1694)、日本古典文学大系 48 西鶴集下、岩波書店、1960

井原西鶴『男色大鑑』貞享4年(1687)、新編日本古典文学全集 67 井原西鶴集②、小学館、1996  
松江重頼『毛吹草』寛永15(1644)、(岩波文庫、1943)  
中村惕斎『訓蒙図彙』寛文6年(1666) (『訓蒙図彙集成』第1巻、大空社、1998)  
『京羽二重』貞享2年(1685) (『京都叢書』10巻、京都叢書刊行会、1915)  
『女用訓蒙図彙』元禄元年(1688) (田中ちた子・田中初夫『家政学文献集成続編  
江戸期第8冊』渡辺書店、1970)  
『雍州府志』元禄2年(1689) (『続々群書類従』第8、国書刊行会、1906)  
『京羽二重織留』元禄2年(1689) (『京都叢書』10巻、京都叢書刊行会、1915)  
苗村丈伯『女重宝記』元禄9(1696)  
『人倫訓蒙図彙』元禄9(1696) (田中ちた子・田中初夫『家政学文献集成続編江戸期IX』渡辺書店、  
1969)  
寺島良安『和漢三才図会』正徳2年(1712) (島田勇雄『和漢三才図会 7』平凡社、1987)、  
三宅也来『萬金産業袋』享保17年(1732) (田中ちた子・田中初夫『家政学文献集成続編江戸期第2  
冊』渡辺書店、1969)  
伊勢貞丈『貞丈雑記』天保14年(1843) (『貞丈雑記1』平凡社、1985)  
『徳川禁令考』前集第6、創文社、1959  
『御触書寛保集成』岩波書店、1958

◆単行本ほか

一 小袖服飾、染織

神谷栄子『小袖』日本の美術 67、至文堂、1971  
上野佐江子「小袖雛形本集成(1) 解題」学習研究社、1974  
上野佐江子「小袖雛形本集成(2) 解題」学習研究社、1974  
上野佐江子「小袖雛形本集成(3) 解題」学習研究社、1974  
上野佐江子「小袖雛形本集成(4) 解題」学習研究社、1974  
西山松之助『江戸町人の研究』第3巻、吉川弘文館、1974  
丸山伸彦『武家の服飾』日本の美術 340、至文堂、1994  
長崎巖『町人の服飾』日本の美術 341、至文堂、1994  
大滝幹夫『染の型紙』日本の美術 340、至文堂、1994  
小笠原小枝『染と織の鑑賞基礎知識』p.237 至文堂、1998  
河上繁樹・藤井健三『織りと染めの歴史 日本編』昭和堂、1999  
丸山伸彦『江戸モードの誕生』角川学芸出版、2008  
朝倉治彦校注『人倫訓蒙図彙』東洋文庫 519、1990年

一 三井家関連

山脇悌二郎『長崎の唐人貿易』吉川弘文館、1964

田村栄太郎『江戸時代 町人の生活』雄山閣出版、1966

『三井事業史』本篇第1巻、三井文庫、1981

『三井事業史』資料篇第1巻、三井文庫、1973

『カリフォルニア大学バークレー校所蔵 三井文庫旧蔵 江戸版本書目』ゆまに書房、書誌書目シリーズ、1990

『三井家文化人名録』三井文庫、2002年

#### 一経済、貨幣

『15～17世紀における物価変動の研究』、京都大学近世物価史研究会編、読史会、1962

永積洋子編『唐船輸出入品数量一覧 1637～1833年』創文社、1987

『日本史小百科 貨幣』瀧澤武雄・西脇康編、東京堂出版、1999

檜谷昭彦「〈付〉近世の貨幣と物価について」『西鶴選集世間胸算用翻刻』p.176、おうふう、1993

#### 一文学

『日本古文書学講座』8近世編Ⅲ、雄山閣出版、1980年

野間光辰『西鶴年譜考證』p.45、中央公論社、1983

谷脇理央、西島孜哉編『西鶴を学ぶ人のために』世界思想社、1993

『井原西鶴集①』新編日本古典文学全集 66、小学館、1996

『井原西鶴集②』新編日本古典文学全集 67、小学館、1996

『井原西鶴集③』新編日本古典文学全集 68、小学館、1996

『保元物語 上』日本古典文学大系 31、岩波書店、1961

#### ◆論文

恵美須屋ツル「寛文時代の小袖―「新撰御ひいながた」に関する研究―」和洋女子大学紀要 2号、pp.14-20、1957

岡田陽子「小袖にみられる雪模様について」『服飾美学』9号、pp.65-82、1980

岡林裕子、横川公子「小袖に見る松文様の展開―小袖雛形本を中心として―」『衣の民俗館・日本風俗史学会中部支部研究紀要』13号、pp.1-18、2003

岡松恵「夜着における猿紋様―万治から元禄期の小袖模様雛形本を資料として―」『服飾美学』45号、pp.37-54、2007

岡松恵・清水久美子「浴衣の歴史とデザイン―寛文から元禄期の雛形本を中心に―」『日本服飾学会誌』20号、pp.18-26、2001

小笠原小枝「近世初期風俗画に顕れたインド更紗―東洋館開館三十周年記念特集陳列から―」『MUSEUM』563号、1999

奥村萬亀子「寛文小袖の成立について」『京都府立大学学術報告理学・生活科学』31号、pp.39-50、1980

- 片岸博子「江戸時代の染色技法書に現われた色名について—茶色に関する—考察—」『家政学研究』  
vol.32 No.2、奈良女子大学家政学会、1986
- 神谷栄子『小袖』「日本の美術第 67 号」至文堂、1971
- 河村まち子・吉中淑江「小袖の模様と色彩 その 1—本学所蔵の小袖雛形本を中心として—」『共立女子大学家政学部紀要』40 号、pp.1-8、1994
- 河村まち子・吉中淑江「小袖の模様と色彩 その 2—本学所蔵の小袖雛形本を中心として—」『共立女子大学家政学部紀要』41 号、pp.25-29、1995
- 河村まち子・吉中淑江「小袖の模様と色彩 その 3—本学所蔵の小袖雛形本を中心として—」『共立女子大学家政学部紀要』42 号、pp.1-8、1996
- 河上繁樹「女院御所と島原 江戸時代前期における小袖をめぐる」『美術フォーラム 21』15 号、  
pp.116-119、2007
- 河上繁樹研究代表「江戸時代の小袖に関する復元的研究」『関西学院大学アート・インスティテュー  
ト』中間報告書、研究成果報告書、2009 年
- 河上繁樹「復元から見た『当世早流雛形』の染織技法」民族芸術 26、pp.79-85、民族芸術、2010
- 河原由紀子「近世小袖文様水車について」『金城学院大学論集家政学編』20 号、pp.99-102、1980
- 筆者・小笠原小枝「小袖文様考—邸内遊楽図屏風（サントリー美術館蔵）を中心に—」『日本女子大  
学家政学部紀要』47 号、pp.95-105、1999
- 拙稿「刺繍—小袖雛形本にみる「すぬい」について—」『日本女子大学大学院紀要（家政学研究科・  
人間生活学研究科）』12 号、pp.69-80、2005
- 拙稿「三井文庫所蔵『染代覚帳』の考察（上）—江戸時代前期の染色価格について—」『MUSEUM』  
635 号、pp.7-23、東京国立博物館、2011
- 拙稿「三井文庫所蔵『染代覚帳』の考察（下）—染色および加工名称について—」『MUSEUM』636  
号、pp.7-21、東京国立博物館、2012
- 拙稿「江戸時代前期の染色名称の考察—小袖雛形本と『染代覚帳』を中心に—」『日本女子大学大学院  
紀要家政学研究科・人間生活学研究科』第 18 号、pp.151-159、2012
- ほか、45 件（原文に収蔵）
- その他、展覧会図録・辞典類（詳細は原文に収蔵）

#### 論文審査結果の要旨

江戸時代前期は、染織史的には遺品のほとんどない時期であり、これまでの研究は当時発行されていた『小袖雛形本』や風俗図巻といった図像的資料や文学作品、随筆等の文字資料に限られていた。しかし、これらの資料は十分にその価値を持っているとはいえ、実際の染織品についての細かな記録とは言いがたく、また、描写されている染織品がどこまで実際に用いられていたの

か、という視点からの考察は十分ではなかった。

本研究は、このような実態の明らかでない天和年間期をとりあげ、これまで資料として埋もれていた公益財団法人三井文庫所蔵の2種類の呉服関係史料『宗感覚帳』および『染代覚帳』を染織資料として取り上げて、すでに研究されてきた諸資料を再度検討することによって天和年間期の京周辺の人々の衣生活を明らかにするものである。

本論文は以下のような構成である。

序論では、研究の背景と従来の研究成果を明らかにし、本研究の目的と意義を述べた。

第1章では、主な資料の検討を行い、その位置を明確にした。

まず、本研究の中心となる『宗感覚帳』と『染代覚帳』の書誌学的検討をおこない、そこに記載されている染織名称を一覧表にまとめた。

次に当時の文学作品として染織・服飾関係の資料としても定評のある井原西鶴の7作品（『好色一代男』『好色五人女』『好色一代女』『日本永代蔵』『世間胸算用』『西鶴織留』『男色大鑑』）に描かれる染織品に関する記述を網羅的に抜粋し表にまとめた。

さらに図像的な資料として多く研究対象となっている小袖雛形本について、天和年間前後の9種を挙げ、記載されている説明の内容を表にまとめた。

以下の章で、この3種の資料を用いて、実際に染め代として使用されていた染織名称と文学作品に登場する人物と染織名、小袖雛形本に見られる贅沢な意匠とその染織名とを比較検討する基礎資料とした。

第2章では『宗感覚帳』「呉服物相場書上」に記載されている染織品の名称と価格から、江戸時代前期の染織品の実態と価格、受容についてその状況を明らかにし、『万金産業袋』（三宅也来〈1732〉）と『唐船輸出入品数量一覧』（永積洋子編）を検討資料として用いた。その結果、輸入品として記載されていた染織品は高価なものであり、一般庶民には手の届かないものであることが明らかになった。井原西鶴はその作品中に丹念な服飾描写を行うとともに、着装している人物の立場や経済面が明らかになるような記述を行っており、染織品の考察においても重要な資料であることが確認された。

第3章では『染代覚帳』の検討を行った。本書に記載されている項目を内容ごとに分類して染代（染価格）に着目し、その価格がどの程度のものであるか、当時の物価や賃金と比較し、西鶴作品に描かれている町人の金銭感覚との比較を行った。その結果、『染代覚帳』は中流から下級の武士、町人、職人層および一般町人女性などの中間層を対象とした呉服関係の染色資料であることが明らかとなった。

第4章では、『染代覚帳』に記載される染色・加工名称に着目し、当時の小袖服飾・染色の実態解明のために、初期風俗画、小袖雛形本、各種染色技法書・指南書等資料と比較検討した結果、いくつかの新知見を見出している。

第5章結論では、新たな研究資料として取り上げた『宗感覚帳』・『染代覚帳』を基とした研究の意義を述べ、第2章から第4章で得られた新知見をまとめた。

①小紋は、京周辺では天和年間当時から着られており、着用者層は従来の説より幅広いことを指摘した。

②紋付は、風俗画より武士の五所紋付が濃色地に白上げであるのに対し、町人・職人層の紋所は描き、繡、型染などの別技法の可能性が認められた。

③小袖雛形本の地色からは、『染代覚帳』には登場しない赤・黄系統色は裕福な人々しか使用できない高価な染料であることが確認された。

④更紗染は2枚以上の型と糊を使用する型染で、輸入の更紗が木綿地であるのに対し、我が国では絹紬地にも染められていたことが明らかとなった。

⑤『染代覚帳』にみられる加工・地質の変更項目と代金の設定は、地質、色、紋、上絵などを組み合わせた注文が可能であったことが明らかとなった。

⑥当時の衣服に対する禁令を意識した商品の展開を行っていたことも指摘できた。

⑦当時の「びろうど」には舶載の織物のビロードと和製の染色の「びろうど色」があったことを明らかにした。

これまで不確実であった江戸天和期の染織名称とその実態について、新資料の解読を丹念に行い、また従来の資料を再検討し比較考察した点は、現存する遺品がほとんど存在しない時期の染織史研究において、あらたな一面を追加することになり大いに評価できるものである。さらに、当時の階層による衣服の着装の違いについて、あらゆる資料から分析するだけでなく、染色の注文という具体的な状況から明らかにできたことは、服飾史研究においても意義のあることである。

以上の点から審査委員会は、本研究の課題の意義、研究手法の妥当性、確かな分析力によって新しい知見が得られたことについて高く評価し、博士（学術）の授与に値すると判断した。